

歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授・
経済評論家

岡田 晃

第四十回

秀吉と二人三脚で天下統一 究極のナンバー2・秀長

再来年、二〇二六年のNHK大河ドラマは「豊臣兄弟―」だという。NHKは「秀吉が天下を統一するまでを秀長の目線で描く」と発表している。主人公は秀長になるとみられる。これまで秀吉は数々のドラマで描かれてきたが、秀長が主人公になるのは初めてではないかと思う。

秀吉を助け数多くの戦いで活躍 金ヶ崎では殿、信長の窮地を救う

秀長は一五四〇年、秀吉の三歳年下の弟として尾張国愛知郡中村（現在の名古屋市中村区）で生まれた。秀吉とは異父兄弟とされることが多いが、近年は同父兄弟説が有力になっているようだ。一五六二年頃、十年以上前に家を出たきりだった秀吉（当時は藤吉郎）が顔を見せ、秀長（当時は小一郎。本稿では秀吉・秀長で統一する）に「武士になって俺を支えてくれ」と誘った。その頃、織田信長は今川義元を桶狭間で破るなど日の出の勢いで、その下で秀吉もちょうど出世

し始めた時期だ。信頼できる部下が身近にほしかったのだろう。秀長は兄の誘いを受ける決断をする。二十三歳前後のことだった。

そこから秀長の活躍が始まる。信長は美濃の斎藤龍興との戦いを進め、一五六七年、斎藤氏の居城である稲葉山城（のちの岐阜城）攻めを開始した。その時、秀吉の部隊が二の丸に攻め込んで米蔵に火を放ち、それを合図に、表で待っていた秀長隊が一気に城に攻め込んだという話が残っている。兄弟の兄弟な連係プレーだ。

ただし、美濃攻めをめぐるこの話は信憑性が低いとされている。それでも秀長の活躍ぶりほうがうことができる。

一五七〇年、信長は越前の朝倉義景を討つべく金ヶ崎（現在の福井県敦賀市）まで進軍したが、浅井長政の裏切りを知る。そのため急ぎよ退却を決断、秀吉がその殿を務めることになった。

殿は危険な任務だが、秀長はその中でも最も危険な一番隊長として金ヶ崎城に立て籠もり、追撃

してくる朝倉軍と戦った。世にいう「金ヶ崎の退き口」を成功させたのだ。命を懸けて信長を救うと同時に、兄の評価を上げることに貢献したのである。

そして三年後、信長は自分を裏切った浅井氏を滅亡に追い込む。この戦いで秀吉は小谷城攻めを任せられ、秀長は秀吉軍の先陣を切って夜襲をかけるなど武功を挙げた。

中国大返し、山崎合戦など大車輪 内政や実務でも力を発揮

このように秀長は数々の戦いで秀吉を助け、秀吉にとってなくてはならない存在となっていた。それは戦の場面だけではなくだった。

秀吉は浅井滅亡の功績として旧浅井領の北近江約十二万石を与えられ、新たな居城として長浜城を築城した。秀長はその城代を務め、内政も担った。秀長の下にも家臣が集まるようになった。藤堂高虎が秀長の家臣となったのは、その頃だ。高

虎はその後、秀長が亡くなるまで仕えた。

さて信長は畿内を平定すると、続いて中国攻めに取っかかり、その総大将に秀吉を任命した。秀吉は山陽側を攻め、秀長には但馬から山陰地方の攻略を任せた。秀長は、「天空の城」として現在有名になっている竹田城を攻め落とすなど、三年がかりで但馬地方を平定した。この功績で秀長は但馬七郡約十萬石を与えられている。

そして一五八二年、秀吉は備中高松城を水攻めで包囲し、秀長も合流した。ここで秀長は、水攻めのための堤の設計や工事内容の検討、建設作業員の手当てなど事務的な調整をすべて取り仕切ったという。実務面でも秀吉を補佐していたのだ。

ところがそのさなかに秀吉は本能寺の変を知り、「中国大返し」を取行。秀長はまたしても殿を務めた。幸い毛利軍の追撃はなかったが、続い



て天王山となった山崎の戦いで今度は先陣を務めるといふ大車輪の奮闘だった。

その後も、賤ヶ岳の戦い、小牧・長久手の戦いなど、秀吉の天下獲りの重要なステップとなった戦いでは、例外なく秀長は大きな役割を果たしている。一五八五年には、秀吉の名代として四国攻めの総大将となり、長曾我部元親を降伏させた。これらの功績により、秀長は紀州・和泉・大和など百万石の大大名となった。

オールラウンドで秀吉を補佐 時にはブレイキ役も

こうして秀吉は天下統一をほぼ成し遂げ、この年、関白となった。まさに、秀長なくして秀吉の天下統一はなかったと言つても過言ではない。政権運営でも力を発揮し、徳川家康など有力大名からの信頼を集めた。

しかも秀長は単なる「補佐役」ではなかった。戦いにおいては先陣も殿も務めたように攻めも守りも強く、実務や内政にも能力を発揮した。豊臣政権の屋台骨となっていたのである。

現在の企業に例えれば、営業の最前線から総務・経理・危機管理なども安心して任せられるオールラウンド・プレーヤーだ。こんな補佐役がいたら、経営トップはどんなに心強いことだろう。

二人は性格もかなり違っていたようだ。派手好みで思い付いたらパツと行動しがちな秀吉に対し、秀長は冷静沈着タイプのイメージだ。歴史学者の小和田哲男氏（静岡大学名誉教授）は「自動車の運転に例えると、秀吉がハンドルを握り運転

している。その助手席に座っているのが秀長で、ナビゲーター役とブレイキ役を務めていた」と形容している（『歴史街道』二〇二四年三月号）。

このように見てくると、「秀吉を支えた」というより「二人三脚」と言ったほうがいいだろう。理想のナンバー2、究極のナンバー2だ。

だが秀長はほどなくして病に伏し、一五九一年に五十二歳でこの世を去ってしまった。実は、秀長の死後の出来事を見ると、逆に彼の偉大さがよくわかる。

同年、秀吉は千利休に切腹を命じた。理由はよくわかっていない。翌一五九二年には朝鮮出兵を開始、一五九五年には後継者のはずだった秀次を切腹させた。これらの出来事は有力大名や秀吉子飼いの武将たちに動揺や苦難を与え、豊臣政権を弱体化させる結果を招いた。

秀長死後の秀吉には、心から信頼でき、時にはブレイキをかける真のナンバー2はいなかった。「歴史にもしくはない」というが、もし秀長が長生きしていれば、豊臣政権の運命は違っていたのではないかと思えてくる。

このことは現代の経営トップにとって、優れたナンバー2を置けるかどうかが企業の命運を分けるという教訓でもある。

岡田晃

（おくだ あきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策——その光と影』（PHP新書）。